

大日本エコロジスト翼賛会

たくき よしみつ
鐸木能光

(承前)

【林十】

翌日、朝から霧のような雨が降っていた。

山はすつぽりとガスに包まれ、マムシ大社の境内も、数メートル先は見えないほどの濃いミルク色の世界に変わっていた。

まだ夜も明けきらぬうちに、瑠璃沼がジャガイモと青菜を差し入れにきた。それを使った簡単な朝食を済ませると、一同は車座になって今後のことについて話し合った。

この旅に出る前に、熊笹は耕作に一つの約束をしていた。納骨の後、熊弥の違言を受け入れるかどうか返事をするという約束だ。不動産会社は閉鎖、財産の処分や憂国社のことは耕作に一任というのが、考えていた線だった。しかし、明西に三日間滞在しているうちに、熊笹の心は揺れ始めていた。考えがまとまらないまま、ほとんどまんじりともせず朝を迎えたのだった。

一同を前に、熊笹はこう切り出した。

「親父殿……いや、大西熊弥会長の遺言は、余輩がこの大日本大熊憂国社の会長の地位を引き継ぐというものでした。まず、この

ことに異議のない諸君は、挙手を願います」

九人の隊員は、即座に全員右手をまつすぐに伸ばした。熊笹の隣に座った耕作が、満足そうにそれを見渡した。

「分かりました。では、余輩はたった今、この大日本大熊憂国社会長を引き継ぎます」

厳しかった隊員たちの表情が一斉にほころび、笑顔に変わった。しかし、それも長くは続かなかった。

熊笹はこう続けた。

「そして、新会長の権限において、大日本大熊憂国社を一時解散します」

隊員たちがどよめいた。静まるのを待たず、熊笹は説明を続けた。

「余輩は今、『一時』解散と言いました。つまり、そのうち再結成する可能性はあるということです。しかし、余輩はみなさんを今までのしがらみから一旦解放したい。なぜなら、余輩の活動理念は、死んだ前会長のものとは大分違うからです」

「お言葉を返すようですがぼっちゃや……いや、会長……」
耕作が口を挟んだ。

「今ここに集まっている者たちは、みな会長の著作、『めりけん根性亡国論』や『米を食わない非国民』『愛国鎖国で新世紀』を読んでおります。前会長亡き後、数十名の隊員が辞めていったわけでございますが、残ったこいつらは、みんな大西熊笹を新会長にと、新たな希望に燃えている者たちでございます。ご心配には及びません」

「そうです！」

「おう！」

九人の隊員たちの間からも、次々に声が上がった。

「それならば話は楽ですね。念を押しておく、余輩の理念は、

かつて日本人はこの豊かな国土を愛し、日本の国土が生むものだけで十分にやってきたし、これからもやっていくべきだということとです。めりけんの小麦やモロコシが入ってこなくても、我々は米を食い、イワシを食い、王子を食って生きていけばよい。山野を切り崩して雪すべりや玉転がし遊びなんぞにうかれていることなく、武道や書道に打ち込むべきである。そういうことです」

「おう！」

「そうした理念はすでに限定出版のあの三冊の著作に記しましたが、余輩はそうした理念は理念として、運動家としてはあくまでも高貴でありたい。拡声器でがなりたてたり、暴力に訴えたりするのは下品です。人に優しく、辛抱強く、不屈の精神で徹底対話……余輩が作る作る新結社には、街頭宣伝カーも日本刀もいりません。そうした地味な活動に、みなさんはついてくれますか？」

熊笹はそう言うと、九人の隊員たちを見渡した。みんな複雑な表情で沈黙していた。

「……でしょう？ 想像がつかないでしょう？ だから一時解散なのです。余輩も今、悩んでいます。この悩みがふつきたとき、余輩はたった一人でも動き始めるかもしれません。そのときこそ、新生大熊憂国社の誕生なのです。みなさんがそのときに何の迷いもなく余輩についてくるといふなら、改めて新しい愛国運動の道と一緒に探りましょう。

その日まで、解散！」

集会室の中は、しばらく沈黙に包まれたままだった。耕作もじっと目をつぶったまま、波打つ畳の上に胡座をかいたまま動かなかった。隊員たちも、半分化かされたような、しかしどう反論していいのか分からないといった顔で、互いに顔を見合わせていた。「いやあ、なかなかのもんだ。君の考え方は、エントロピー理論からいっても極めて正論だなあ。いやあ、見直したよ、大西君」

部屋の隅でずっと様子を見ていた瑠璃沼が、突然大声を出した。「余輩は横文字は嫌いです。この前も言いましたが……」

「いや、失敬、失敬」

熊笹が最後まで言い終わらぬうちに、瑠璃沼は笑顔でこう説明し始めた。

「つまりだな、結論だけを言えば、余計なものは作るな。土に還らないものは特に作るな。作ったものは極力移動させるな、ということである。『米を食わない非国民』『愛国鎖国で新世紀』か。まったくその通り。ハツハツハツハツハ……」

瑠璃沼は一人高らかに笑った。誰も彼の話を理解してはいなかったが、それ以上質問する者もいなかった。

熊笹は壊れた硝子窓から外を見た。外は相変わらず濃い乳白色の霧に包まれていた。

翌日は見事な秋晴れになった。

熊笹と憂国社の一行は、右手前方に広がる夕焼けを追いかけるように、東北道を一路東京に戻った。ただし、クラウンの後に続く街宣車が一台減っていた。耕作と井上が明西に残ったのだ。

K市の手前のサービスエリアで、豚汁定食を食べながら改めて最後の「解散式」をすると、熊笹は街宣車二台と別れ、次のインターを降りた。

熊笹が家に着いたときは、もう夜も更けていた。

玄関のドアを開けると、三匹の猫が熊笹を出迎えた。

テーブルの上に、ミケちゃんのメモが残っていた。

「おかえりなさいませ。殿の留守中、二十五万円の座机が一つ売れました。昨日は与作が隣のハンバーガー屋の倉庫に侵入したらしくて、店長がまた文句を言ってきましたが、ミケがすっかり叱

っておきました。それから、愛美須開発の榊田さんという方から二度ほど電話がありました。また連絡するとのことですよ」

三毛猫の与作は、売約済みの札が貼られている座机の上で寝ていた。一応、熊笹自らも叱っておくことにした。

「与作！ 相変わらず意地汚いやつだな。あんなめりけんの牛の肉なんぞを食べたがるのは、日本猫の風上にも置けん……」

誰もいない店内に熊笹の声が虚ろに響いた。

与作は片方の耳をかすかに動かしただけで、知らん顔で眠り続けていた。

【林才】

「ここからあそこの杉林の縁までがサツマイモである。その隣には大根が植えてある。あそこの沢の前はヤマイモであるが、これは非常用食料として、普段はほっぽつといてある。その横は今度ヒタシマメをやってみるつもりであるが、その前に……」

耕作は瑠璃沼の説明を黙って聞いていた。

マムシ山頂上付近と中腹は傾斜が緩やかになっていて、かつては一部段々畑だった。耕す者もなく荒れていたのを、この奇怪な男がせつせと耕してしまったわけだ。

登記上は大部分が大西家の土地で、残りが武士俣家の土地だ。武士俣家の分は承諾済みとしても、大西家の土地のほうは、いくら長いこと放置していたとはいえ、他人が勝手に畑を始めてしまっていないはずがない。

しかし、耕作は不思議と怒る気にはなれなかった。

「水がいいし、雑木林の落ち葉が、ある程度堆肥になるから、結構いい加減にやっつけていてもそこそこに採れるんだな、これが。もつとも、タヌ公やキジバトが悪さをするんで、誰のために作った

のか分からんようなものもあった。しかしまあ、やつらのほうがこの土地では先住者だからな。それは仕方ないことである」
瑠璃沼の説明は続いていた。

耕作は黙って屈み込むと、足元の土を手を取った。瑠璃沼が鍬を入れたばかりらしく、指先でほぐすと、土は指の間からぽろぽろとこぼれ落ちた。

「いい土じゃ」

耕作は誰に言うともなく呟いた。

「そうだろう？ 悪くない。まったく悪くない。それに、この山は特に水が素晴らしい」

「しかし、ここにオートキャンプ場を作ろうてえ計画があるんじゃない？」

「そうだ」

「阻止できんのかね？」

「それはあんたが次第である。なにしろ、法律論でいけば、この土地にぼくは何の権利も持っていないのだからな。武士俣のばあさんはあんなふうに頑張っているが、もしあんたら大西家がこの土地を放棄すれば、それ以上は頑張れんだろう」

耕作はふつと溜め息をついた。自分もまた、この土地には何の権利もない。自分は大西家の人間ではないのだ。

しかし、耕作はそのことは口に出さず、瑠璃沼にこう訊いた。
「大西家がこの土地を手放せばどうなるね？」

「都市のゴミが持ち込まれ、表土が剥ぎ取られ、土が強姦されるだろう。そして、増大したエントロピーを土に還せなくなつて、山全体が病に侵され、やがては死ぬ」

「なんとかピーとかいうのは知らんが、まあ、多分そういうことになるんだろうかね」

「そういうことである。なにしろ今、地球上では、毎年人間一人

当たり五トンの表土が失われているのだからな」

「そう言われても、ピンとこないがね。まあ、多分大変なことな
んだらうね」

「大変なことさ。ピンとこないなら、身近な具体例を見せよう。
この山の向う側の土地こそ屈辱の土地だ。見に行くかね？」

瑠璃沼が言った。耕作は黙って領いた。

二人は山道を一時間ほど歩いて下り、むろやまだ室山田地区と呼ばれてい
る集落に向かった。

果樹園と畑が広がる、一見のんびりとした農村風景だが、かつ
ての明西村室山田集落の風景とはかなり違う。このへんは一面水
田だったはずだ。減反政策で、水田が果樹園や畑に変えられたの
だろう。しかも、近づくにつれ、それらの農地さえ、不思議なよ
そよそしさを放っていることに耕作は気づいた。

その正体は、まず二人を出迎えたアーチ型の看板から読み取れ
た。

〔明西グリーンパーク・ガーデンハウスビレッジ入口〕

「いつからこんな長ったらしい名前になったんだね？」

耕作は瑠璃沼に訊いた。

「いや、この集落は今でも室山田という。この名前は、室山田の
農家が手放した農地に付けられた名前なのだ。まだ、入居者は
誰もいない。売出しは来春からだそうだ。ほら、あそこに一軒だ
け建っているのがモデルハウスだ」

瑠璃沼はそう言うと、舗装したばかりらしい、アスファルトの
表面が黒光りする道を歩き始めた。耕作も後に続いた。

二人がモデルハウスにたどり着く前に、白いライトバンと淡い
メタリック・グリーンのベントツのワゴンが二人を追い抜いていっ
た。

「ほう、お客さんかな。そういえば今日は休日だったな」

瑠璃沼が二台の車を目で追いながら言った。

車は案の定モデルハウスの前で停まり、ライトバンからは青年が一人、ベンツからは二人の子供を連れた中年の夫婦が降りた。

「これが一応モデルハウスでして、Bタイプですね、そのパンフレットに載っている、ハイ……」

青年が明るい声で説明し始める。耕作は、その声に聞き覚えがあった。明西に到着した日、マムシ大社の境内で、りえちゃんと言い争っていた……確か、栗本とかいう若造だ。

「……ハイ、カナダ製ですから、寒さにはもう完璧に……していません。断熱材なんか、ガチツと、こーんなに分厚く……てますから……」

青年は左手の親指と人差し指を、これ以上開けないくらい大きく開きながら、何やら建物の性能を熱っぽく話し始めていた。補聴器のイアホンを通じて、青年の声が耕作の脳裏に途切れ途切れに届く。それを聞きながら、耕作はモデルハウスのほうにさらに近づいていった。

青年が二人に気がつき、一瞬話をとぎらせた。客の四人家族も耕作と瑠璃沼のほうを振り向いた。が、青年が無視して説明を続け始めると、また彼のほうに向き直って、話に聞き入った。

「水は簡易水道がもうここまで来ています、ハイ。排水はU字溝を建設中として、何の問題もないです、ハイ。それからそれぞれの別荘には一反の畑と五百坪の果樹園がついてまして、これが目玉になってますです。果樹園のほうは栗と梨がメインでして、秋が楽しみですよオ、ハイ……」

青年は笑顔でモデルハウスの向こうに広がる果樹園を指さした。「都会の人間が、一反の畑を耕せるのかね？」

耕作が瑠璃沼に小声で言った。瑠璃沼は向こうの山に跳ね返り

そんな大声で答えた。

「耕すのはこの元地主である。日腐れ金にだまされて農地を売って、拳句の果ては、それを買った都会人の小作になりさがったわけである。採れた作物は宅配便でこの別荘の主たちに送るんだそう。東南アジア侵略方式と同じだな。企業が考えそうなことだ。あいつらには土も木も水も札束に見えるらしい」

青年がぎょつとした顔で瑠璃沼を見た。それでもなんとかこの場を繕おうと反論しかけたとき、客の中年紳士が口を開いた。

「結構なアイデアじゃないか」

中年男は、そう言って瑠璃沼と耕作のほうを一瞬見たが、すぐに栗本青年のほうに向き直り、二人にも聞こえるように意識した声でこう続けた。

「日本も、いつまでも自作農主義では駄目なんだよ。農地法も見直しの時期に来ている。農家のみなさんだって、これからは農業をバリバリやろうなんてところはないでしょう？ やりたくても後継者がいないしねえ。ここだって、元は売れない土地でしょう。それをこういう形にリゾート開発して民間資本も導入すれば、土地の価値が上がって売れる土地に変わる。我々都会の人間は憩いの場として、農家の人たちには現金収入のための手段として活用できる。こんな結構なことはないね」

「ハイ……」

栗本青年は、思わぬ助け舟に再び表情を崩し、中年男に向かって頭を下げた。

「そんなことをしていたら、日本人を養う農作物を誰が作るんだございますかな？ この土地も、元は見事な水田だった。農家が米を作らなくなったら、飢えるのは都会に住むあんたらからじゃございませんか？」

耕作が憤然と反論した。

男は、今度はまっすぐ二人のほうに向き直って、こう言った。

「米なんていう単一作物は、こんな山奥でちまちま作っていることはないんじゃないですか？ あんなものは東南アジアにでもアメリカにでも任せておけばいい。広い土地のあるところで、バーンと大型機械を入れてバリバリ作ったほうがずっと効率がいい。これだけ高度化した日本で、非能率のことをいつまでもやっていては駄目ですよ。この土地だって、農業という足かせから外して自由に見てやれば、こんなふうには夢のある計画も生まれてくるわけでしょう？」

「あんなものとは、米作りのことかね？」

耕作が声を荒げた。興奮で震える耕作の肩に、瑠璃沼が手を置き、なだめるように言った。

「こいつは底抜けのアホウだ。腹を立てるだけ馬鹿らしい」

「アホウとは私のことか？ 君、今の言葉は取り消しなさい」

「アホウと議論しているほどぼくは暇ではない」

「なんだと？」

事態が収拾つかなくなる寸前に、栗本青年が頭を下げ、平謝りに謝りながら、四人を次の場所へ案内するために車に乗せた。

耕作と瑠璃沼に排気ガスをたっぷり浴びせるようにして、二台の車は去っていった。耕作の身体の震えはなかなか止まらなかった。

瑠璃沼はモデルハウスに近づき、白いサイディング壁を拳でコンコンと叩きながら言った。

「どうせ夏休みのほんの数週間くらいしか使わないんだらう。資源の無駄遣いだな」

耕作は、真新しいアスファルト舗装路の上に残されたばかりのタイヤ跡を見つめていた。数本の筋の中に、何か鈍く光る紐のようなものが残されていた。近づいてみると、今轆かれたばかりら

しいトカゲの死骸だった。

「瑠璃沼君……」

耕作は道端に直立したまま低く呟いた。

「わしは馬鹿だから、今の男が言っていたことにうまく反論できない。米作りは日本人の命じゃが、外国の広い土地で、大型機械を使ってやる農業には、どう頑張ってもたちうちできんのだろうね」

瑠璃沼は振り向いて、耕作の視線の先にあるトカゲの死骸を見た。そしてさつきまでとは打って変わった穏やかな口調で話し始めた。

「農業は製鉄業や自動車工業とは違うのだよ。土と水と太陽がなければできない。一定の土地が育てる農作物の量には限りがある。機械を導入して能率を十倍、二十倍に上げても、農民の暇が増えるだけで、作物が十倍、二十倍採れるわけではない」

「しかし、農民が暇になれば、その分広い土地を耕せるじゃろ。そうすれば多くの作物が採れるわけじゃろ？」

「広い土地を手に入れるということは、その分、土地を取られる農民も出るといふことである。その人は町に出て給料取りになり、米も野菜も店先で買うようになる。その人が買う分の農作物を、土地を手に入れた人が作る。結局同じことである。そして決定的なことは、工業の手法を農業に取り入れようとすればするほど、その分余計にエントロピーが増大するといふことだ」

また「なんとかピー」だ。耕作は問い返す気力もないという顔をした。それに気づいた瑠璃沼が、少しばつの悪そうな顔で、こう言い直した。

「エントロピーというのは、『汚れ』ということだよ。世の中のあらゆるものは、汚れていく方向に変化する。人は歳をとって死ぬし、機械はやがて錆ついて動かなくなる。元には戻らないわけだな。人が若返ったり、機械が時を経て新品よりも新しくなると

いうことはない」

「わしの身体などはエントロピーだらけということかね？」

耕作が口を挟んだ。

「そうだな。そしてやがてはゴミになる。もつとも、生き物というのは、生きて活動している間も絶えず環境を汚している。ぼくらは熱や二酸化炭素を吐き出し、糞をする。それでも地球が今まで糞で埋まらず、灼熱地獄にもならず、生物が何世代も生き続けてこられたのは、地球が汚れを宇宙に捨てる機構を持っていたからである。」

その機構のカギが土と水だな。今死んだそのトカゲはやがて土壌生物に分解され、熱を出しながら無機物に変わる。それは土のおかげだ。土がなければ、地球は汚れっぱなしになるということだ。熱のほうは、水が吸収して水蒸気になり、空の高みで熱だけを宇宙に放出して、水はまた冷たい雨となって土に戻ってくる。この循環機構システムが壊れてしまったら、地球は死の世界になってしまう」

耕作は瑠璃沼の説明を黙って聴いていた。しかし、別段感心はしなかった。そんなことなら、百姓なら誰でも本能的に知っていることだ。自然の摂理を尊び、「山の神」「雨の神」を恐れながら、何百年もの間、畑を耕してきた。ミミズを大切にし、藁や枯れ葉を肥やしにする術を誰もが知っている。なんとかピーなどという偉そうな横文字を持ち出されるまでもない。水と土を知り尽くすことは、農業の基本ではないか。

しかし、そんな単純なことを、自分は今、忘れていた。自分もまた、土を忘れ、コンクリートの世界の人間になりはてていた。耕作はそのことに気づき、愕然とした。

トカゲの死骸を手に取り、草むらの中にそっと置きながら、耕作はこう言った。

「人間一人につき五トンの土がなくなっていると言いなすったね」「そうだ。コンクリートやアスファルトの下の土はもはや土ではない。森林を失い、表土が流出した土も、土ではない。風が吹けば土ぼこりが舞い、やがて砂漠化していく運命だ。地球は今、全身火傷をおって、皮膚呼吸ができなくなる一歩手前である」

「瑠璃沼君」

耕作は草むらの中のとカゲの死骸を見つめたまま言った。

「わしも明日から畑を手伝いたい」

瑠璃沼は濃い眉毛の下の目を細めて答えた。

「それはいい。きつと十年は長生きするぞ、じいさん」

【森】

明西町から戻った数日後、熊笹は、亡き父・熊弥くまやが経営していた大熊不動産開発商事の事務所が入っているマンションへと向かった。

事務所は麻布にあった。場所は耕作から教えられて分かっているものの、訪ねるのは初めてだった。

マンションはすぐに分かった。一階の駐車場に、例の街宣車二台が停まっていたからだ。

マンションの入口はオートロック式になっていた。耕作から部屋の鍵は預かっていたが、玄関ロビーのオートロックのことまでは聞いていなかった。熊笹はこのてのものが大の苦手だ。

ドアの横には数字が書かれた四角いボタンが並んでいるだけだ。これを使って暗証番号を入力するのだろうか……。

少し迷った末、熊笹は一応事務所の部屋番号を入れてみた。「ハイ、大熊不動産開発商事です」

予想に反して、インターホンから若い女性の声が返ってきた。

会社は閉鎖したと聞いていたが、まだ残務整理のために社員が残っているらしい。

「大西熊笹と申します。岩野さんから頼まれて、荷物を取りに寄ったのですが……」

「ハイ……どうぞ……」

少し間があつた後、ドアが開いた。

事務所は八階の南端だった。熊笹はエレベーターには目もくれずに、非常階段を上っていった。十階以下の階差なら、極力階段を使うのを身上としているのだ。

事務所のドアの前にたどり着くまでに、たつぷり三分はかかった。呼び鈴を押すと、しばらくしてグレーの事務服を着た若い女がドアを小さく開けた。事務服の胸には、金糸で「大熊」と刺繍されている。まだ二十歳前だろうか。緩やかなウェイブのかかった髪を肩まで伸ばしている、色白の美女だ。

「お邪魔します。大西熊笹です」

「いらつしやいませ。どうぞ」

女は熊笹の特異な格好を見ても驚くでもなく、むしろ安心したような表情になってドアを大きく開けた。

「親父殿……いや、会長が急にあんなことになって、大変でしたね。岩野さんはもう事務所は閉めたと言っていました。残った仕事の整理ですか。ごくろうさまです」

「いいえー。あの……今、ラーメンを作ろうとしてたところなんです。もしよろしければ、ご一緒にいかが？」

女は、そう言うと、熊笹を奥の部屋に案内した。正面に巨大な木製の机がある。どうやらここが会長室らしい。

女の笑顔には不思議な魅力があつた。人を疑うことを知らないような天真爛漫さと、触れればすぐに傷ついてしまうような、きめ細やかな美しさが同居している。

熊笹はすっかり彼女を気に入ってしまった。

もし次の職場が決まっていけないのなら、自分の店に店員として誘おうか……しかし、そうなるとミケちゃんの不機嫌になるだろうな……などと勝手な想像を巡らせていると、奥の部屋から眼鏡をかけた長身の男が現れた。今までコンピュータを相手に仕事をしていた様子だ。眼鏡の奥の小さな目が少し充血している。

「こんにちは」

「お邪魔しています。大西熊笹と申します」

「これはこれは、会長のご息さんですね。ワタシ、伝地祥太郎でんちしょうたろういいまんねん。デENCHIは伝えるちゅう字に地球の地ですね。ひとつおおきに。ラーメン、塩と味噌があるんどすけど、どっちがよかでがんすか？」

その男のめちやくちやな方言に戸惑いながらも、熊笹はつられて「味噌ラーメンを」と、答えていた。

「海野クーン、味噌一つ追加ね」

「ハイ、課長」

海野と呼ばれた女子社員は、そう言うのとトイレの横の狭い給湯室に入ってしまった。

「ところで、岩野さんの話では、会長室の棚に、未整理の書類ケースが三つばかり残っているということなんです……」

「あれじゃろか？」

伝地と名乗った男は、部屋の壁にある本棚を指差した。黒い背表紙のケースが確かに三つ並んでいる。熊笹はそのうちの一つを取りだして、机の上に広げた。伝地も一緒に覗き込んだ。

ケースの中には、フロップピーディスクが数枚と、手書きのメモが数十枚。そして細かな書き込みがある日本地図が数枚入っていた。

「ふへーい、こりや凄いいじゃん。日本中の農地転用開発計画と、

それに参入しようとしている企業のリストでんがな、こらまいたね」

伝地が言った。

「そんな、ぱつと見ただけで分かるんですか？」

熊笹は驚いて訊いた。

「そもそも、こちららデータ解析の専門家ですさかい。これを取りにこられたんでっか？」

「余輩は中身までは聞いていなかっただが、どうやらこれらしいね。しかし、重そうだな。今日は徒歩だし……」

「もしお急ぎでないんやったら、近日中に整理しときまっせ」

「いや、ただでさえ忙しいでしょうから、そんなことまでは……」

そこに女がカップラーメンを三つ、お盆に乗せて運んできた。

「味噌二つ、塩が一つ。塩は私よ」

「ほい。じゃあ、エントロピーが増大せんうちに食べましょか」

「え？ 何ですって？」

「あ、冷めんうちに食おうちゅう意味ですたい」

伝地はそう言うと、周りにあった椅子を二つ持ってきて、会長用の机を囲むように置いた。熊笹は恐縮しながら、一人、肘掛けのついた豪華な椅子に座って、味噌ラーメンを受け取った。

ラーメンをすすりながら、熊笹は伝地に訊いた。

「余輩は横文字は好かんのだが、そのエントロピーというのは、日本語で言えばどういう意味なんですか？」

「この場合は、まずくなる度合いてえことでっしやるか」

伝地は間髪入れず、そう答えた。

「このラーメン、放っておけば冷めちゃいますね。冷めるとまずいでしょ。これ、エントロピーが増えたということですね。冷めたラーメンは放っておいても元の熱いラーメンには戻りませんやろ。熱は放っておけば温度の高いほうから低いほうへ移るわけ

やね。決してその逆はないでしょ。で、エントロピーは増えることとはあっても、決して減ることはない……というのが、有名な熱力学第二法則、別名エントロピー増大の法則ちゅうんですわ。同じように、汚れたものは放っておいても元には戻らん。壊れたものも、放っておいたら元には戻らん。世の中、すべてそういうふうにできとるわけですね」

伝地は一気にそこまで言うと、またズルズルとラーメンをすすり始めた。

熊笹は箸を止め、少し考えてからこう言った。

「ということとは、つまりこのラーメンはウンコになるが、ウンコはラーメンには戻らないというようなことかな？」

伝地はラーメンを口に入れたまま、コックリと頷いた。

結局、熊笹はその日、カップラーメンを食べ、伝地という青年と話をただけで事務所を後にした。耕作から頼まれた書類というのは、あまりにも重そうなので、そのまま置いてきた。どっちみち耕作はしばらくは明西町にいるだろう。書類を事務所に置きっぱなしにしてあることが気になると言っていただけで、今すぐこれをどうこうするということではなさそうだ。急ぐことはない。家に戻ってから、熊笹は耕作に簡単な手紙を書いた。

〔前略、その後どうですか。余輩、相続の件を考え直し始めております。親父殿が残した財産を、親父殿が犯した罪の罪滅ぼしに役立てたいと思い始めた次第です。〕

余輩は新しい運動を始めます。

ところで大熊不動産の事務所で残務整理をしている二人はなかのなかの人物と見受けました。伝地君と海野君。あの二人にはぜひ余輩の新しい運動を手伝ってもらえたらと願っております。

近日中にまた明西を訪れるつもりです。これから冷え込みが厳

しくなる季節が参ります。あのぼろな社務所で明西の厳しい冬が乗り切れるのかどうか、心配しております。どうかお身体を大切に。熊笹拝」

書き終えて、便箋を封筒に入れながら、熊笹はふと思った。

しかし、渋柿は時間が経てばおいしくなる。ウンコはやがて土に戻っていき、その土がラーメンの元になる小麦を育てる。エントロピーというのも、随分いい加減な言葉なのではないか……と。

【森一】

「ほれ、次は『負けたらタコよ』さやるでえ。おつ、池原のじつちゃん、待ってましたって顔だね。じゃあ、一回戦は堀さんと池原のじつちゃんね。ア、ホレ、負けたらタコよ、ヨヨイノヨイ！」

大広間から、レクリエーション係の田畑課長の大声と、十人余りの老人たちの嬌声が聞こえてくる。老人の嬌声というものも妙なものだが、実際そうとしか表現しようのない声だった。

それをBGM代わりに、事務室では栗本青年とサヨちゃんが、何やら深刻な顔で話し合っていた。

「……うまくねえよ、サヨちゃん。なんであんなやつらと関わるんだ？ 親父も困ってんだ。このままじゃあ役場の空気つてもんも、なあんかおかしくなってくるしよ。サヨちゃんはこの親父さんからも、俺、頼まれたんだ。サヨちゃんをしっかりとつかまえておいてくれって」

「私は私なりに真剣に考えているの。二郎さんが何を心配しているのか知らないけれど、瑠璃沼先生も武士俣さんも、みんな立派な人よ。開発に浮かれている人たちより、ずっとしっかりした考え方をしているわ」

「瑠璃沼ってやつは共産主義だべ」

「全然違うわ」

「いや、有名らしいぞ。それで職場も追われて、こんなところまで流れてきたって噂だぞ」

「くだらないわ、そんな噂」

広間のほうからひとときわ大きな笑い声が起こった。

「じいさん、あぶねえなあ、フンドシからはみだしとるでよお」

田畑課長のその声で、さらにもう一度、大きな笑いの波が続いた。

ここは町の外れに昨年建設された「ふれあい健康愛情ランド」という施設だ。建設費用の大半は「心のふるさとプロジェクト」を計画推進している第三セクターから出ている。開発を前に、まず、土地も後継者もいなくなってしまった農家の老人たちへの厚生施設建設を……というふれこみだった。

一週間に一度ずつ、巡回バスが町の各地区別に老人たちを乗せてここに連れてくる。老人たちは一緒に風呂に入り、早目の昼食を食べ、あとは夕方までこうして大広間でゲームをしたり歌ったりしながら楽しむのだ。

農業をやめてしまった老人たちの多くは、週に一度の「愛情ランド行き」を楽しみにしている。しかし中には、武士俣夫妻のように、迎えにきたバスを追い返した者もいる。

「目腐れ金で買収した後は、酒と馬鹿騒ぎで百姓の魂さ抜く気か？ 念のいったこった」

りえばあさんはこう言っつて、迎えにきた役場の職員に背を向けた。そのときの職員というのが、他でもないサヨちゃんだった。

そのひと月後、武士俣のじいさんが倒れた。サヨちゃんは入院手続きに奔走した。

「サヨちゃん、まずいよ。役場の足並み乱すのはまずいよ」

栗本青年はまた同じ言葉を繰り返した。

「な？ 武士俣のばあさんに、もう一度あたってみてくんねえかなあ。ばあさん、依怙地になってっけど、今じゃあサヨちゃんのことは誰よりも信用してるべ。な？ 頼まれてくれよお」

「話っていうのは、それだけ？ 私、まだ役場に仕事残してるから……」

サヨちゃんはそういうと、さっさと立ち上がって事務室を出ていった。

「サヨちゃん……」

背後で栗本の情けない声がしたが、サヨちゃんはかまわず愛情ランドの玄関を出て、自分の軽自動車に向かった。

そのとき、建物の窓から、廊下を通して大広間の様子を窺っている二人組の姿が目に入った。岩野耕作と大熊憂国社隊員の井上だった。

二人のほうもサヨちゃんに気がついた。井上が笑顔で近づいてくると、こう言った。

「どうも、先日はありがとうございます。立派な建物ですね。建ってまだ新しいんでありますか？」

「ええ、まだ一年です」

サヨちゃんは愛情ランドの概略を簡単に説明した。

「りえちゃんが言ってた通りだ」

耕作が横から口を出した。

「武士俣さん、何て言っていましたか？」

サヨちゃんが訊いた。

「おらはあんなことしながら死にたくはねえ。年寄りには風呂さ入れて酒吞まして適当に遊ばせておけば喜んどると思ったら大間違いだ。そんだったら自堕落なエサに釣られて畑を忘れちゃうほどまだぼけてねえ。おらは畑で死んで、マムシ山の肥やしになる……そう言うてました」

耕作は多少自分の創作も加えて、そう答えた。

サヨちゃんは黙って微笑むと、小さく頷いた。

「社務所のほうにもまた寄らせてもらいます。何かお困りなことがありましたら、いつでも言ってください。じゃあ、私、役場に戻りますので」

そう言いながら軽自動車に乗り込もうとしたとき、サヨちゃんは二人が乗ってきた街宣車の横にガムテープが貼り付けられているのを見つけた。確か、へさっさと返せ 北方領土」と書かれていた部分だ。

「これ、どうしたんですか？」

サヨちゃんは気になって訊いてみた。井上が苦笑しながら答えた。

「はい。瑠璃沼先生といろいろと話しまして。どうも、このまま北千島が日本に返されたとしても、愛美須開発とかがさっさと乗り込んでゴルフ場やらスキー場やらを作るのでは何にもならん。それはむしろ反愛国的行為ではないかということになりました。

指導部長とも相談して、この問題は宿題としてしばらくの間考え、ることとし、とりあえずは消すことにしたのであります」

それを聞いて、サヨちゃんはにっこり笑うと、今度は大きく頷いた。

「サヨちゃん！」

そのとき、一人の老人が悲痛な声を上げた。振り向くと、室山田地区の室^{むろ}さんが、玄関に泣きそうな顔で立っていた。

「どうかしましたか、室さん」

「俺は帰る。りえちゃんの言う通りだ。こんなことをしてはばちが当るべ。すまねえ、送ってつてくれんかの」

室山田地区は役場とは反対側の方角だった。サヨちゃんがほんの少し躊躇しているすきに、井上が言った。

「自分がお送りするであります！」

その夜、社務所に熊笹からの手紙が届いた。読んだ耕作は驚いて町まで車で駆けつけ、郵便局の前の公衆電話から熊笹の店に電話をかけた。

「ぼっちゃま、何でございますか、この伝地と海野とかいう者たちは。じいはそんな輩やから、まったく知りませんぞ！」

【森十】

熊笹がクラウンを飛ばして麻布のマンションに駆けつけたときには、すでに夜の十時を回っていた。

あの二人がまだ社務所にいるとは思えなかったが、それにしても一体何者だったのだろう。泥棒にしてはやけに堂々としていた。女は会社備えつけの事務服を着ていたし、男は慣れた様子でコンピュータを扱っていた。一緒にラーメンまで食ったのだ。万一にも「部外者」などとは思いつかなかった。正体が何であれ、その豪胆さと演技力は大したものだ。

玄関ロビーに通じるドアの開け方は、今度はちゃんと耕作に確かめてあった。住民は、数字キーが並ぶパネルの右横にある小さな丸い凹みにドアの鍵を入れればいいらしい。

熊笹はキーを使ってロビーに入ると、今回はエレベーターを使って事務所のある八階まで上った。

事務所のドアは半開きになっていた。中から明かりが漏れている。ドアに手をかけようとしたとき、中から聞き覚えのある、あの若い女の声が聞こえてきた。

「……デench、しつかりして、痛む？ お医者さんに行く？」

熊笹はそのまま中に入った。部屋の隅にあの長身の男が倒れて

いて、女が介抱しているところだった。

「どうしたんだ？」

熊笹はそう声をかけながら二人のところへ駆け寄った。

女は突然の侵入者にさほど驚いた顔もせず、熊笹を認めるなり泣きそうな声で言った。

「ラーメンを買って帰ってきたら、デンチが倒れていて……」

改めて周りを見ると、書類が一面に散らばっている。何者かが押し入って荒らした直後らしい。

「大丈夫や。ちょこつと気絶しただけやがな。おオイテ……」

先日伝池と名乗った男が顎をさすりながら起き上がった。

「本当に大丈夫？ どこが痛むの？」

女は男の頬をさすりながら、優しく声をかけ続けている。

熊笹は何が何やら分からず、しばらくはその場に立ったまま二人の様子を見守っていた。

伝地は机に手をかけてふらふらと立ち上がると、コンピュータの前に行つて、フロッピーディスクのケースを確認した。

「タコやなあ。かんじんのものはここやのに」

そう言うと、伝地は一枚のフロッピーディスクを取り出して、熊笹のほうに差し出した。

「親分さんこれ。この前の資料をまとめたもんですねん。ちょうどいいとこに来はったね。今、プリントアウトするけん」

伝地はそう言うと、ディスクをコンピュータに挿入し、何やら操作し始めた。

「あなたがたは一体何者なんだね」

熊笹はようやく、言わなければならぬ言葉を口にした。

「ごめんなさい。ただの居候なの」

女が悪びれずに微笑みながら言った。

「彼はデンチ、私はマリア。この事務所、使われていないみたい

だから、しばらく宿をお借りしていたの。ごめんなさい」

「それだけではよく分からない。ちゃんと説明しなさい」

マリアの不思議な色気に圧倒されながらも、熊笹は極力威厳を保った声でそう言った。

「だから、ただ宿をお借りしただけなの。私たち、旅をしているのよ。伝道の旅。この世界の真相について、心ある人たちにお話しているの。親分さんにもお礼しなくちゃね。今夜はここで私たちと一緒にすごしましょ。デンチの怪我を診たらお茶を入れるから、ちよつと待っててね」

プリンターが作動し始めた。伝地が満足そうにそれを見ている。「結構大量なデータやさかい、全部打ち出すまでには一時間くらいかかるかもしれんなあ。でも、親分さん、ディスクのまま持って帰っても困りますやろ」

凶星だった。コンピュータなどからきし扱えない。

熊笹はどう返事していいものか分からないまま、プリンターが打ち出す文字を覗き込んだ。〈列島開発人脈マップ〉というタイトルが目に入った。

マリアは伝地の顔にできた痣あざをそつと触っていたが、大したことはないと判断したのか、やがて給湯室のほうに消えた。

「誰に殴られたんだ？」

熊笹は伝地に訊いた。

「若い二人組やった。箭内組やないかなあ。いや、おれらにはまったく関係のうて、単純にここに残っていた資料が表に出たらまずい連中かもしれないなあ。なにせ親分さんの親父さんは、政財界の裏を知り尽くしていた人らしかごたるもんね」

「なんで親父殿のことを知っているんだね？」

「ここに寝泊まりしている間じゅう、残っていた資料はほとんど読ませてもらったもの。いやあ、おもしろかった。日本中の悪いやつ

の名前がズラズラ出てきて……。かと思うと、どこの村のなんていう農家が借金がいくらあって、これを押さえればこの村はこぞって身売りするやるとか、そんな細かいデータまでありよる。どうやらここのボスの次の活動は、農地買収だったようやね」

「親父殿は利権屋の手先だったのさ」

熊笹はそう言った。怪しげな連中に、そんなことまで言ってしまう自分が不思議だった。なぜか分からないが、この二人組に対しては警戒心や猜疑心が湧いてこないのだ。

「じゃっどん、ボスも結構悩んではったみたいよ。自然保護団体や動物実験の廃止を求めるグループへの献金の領収書なんかがいっぱい出てきたもんね。せめてもの罪滅ぼしのつもりなんかねえ」
伝地はそう言うのと、会長室に入り、机の引き出しから紅茶の空き缶を持ってきた。

「ほら」

そう言うって中身を熊笹の前の机の上にあける。小さな金属塊がたくさん転がり出てきた。一つ手に取ってみると、それはパンダの形のバッジだった。

「何だね、これは？」

「WWFのパンダちゃんバッジやね」

「WWF？」

「世界自然保護基金ゆうのね。ほら、金色のもあるでしょ？これは年会費一万五千元以上の人が貰えるバッジなのよ。親分さんくらいの偉い人やと、やっぱこの金バッジじゃないと貰禄つかんでしょ」

そう言うと、伝地は金色のバッジを一つつまみ上げて、熊笹の羽織の襟元にとめた。

「まあ、素敵！ 似合うわ、とっても」

カップ酒の空き瓶三つと、日本酒の一升瓶を運んできたマリア

が、それを見て嬉しそうな声を上げた。

「そんなに似合うかね？」

「ぴったりやね。まさに親分さんのためにデザインされたような紋章やがな」

そう言われ、熊笹は苦笑した。

物心ついて以来、父親にはことごとく反発してきたが、あの「鬼熊」と呼ばれた父親の遺品がこんな可愛らしい代物だとは……。父親の窺い知れぬ一面を垣間見たような気がして、熊笹は複雑な思いに捕らわれた。

「親分さんには、お詫びの印として、私が今夜はずっとお相手するわ。お酒も今買ってきたばかりだし……」

マリアはそう言うと、洗面所のほうに消えていった。

熊笹は、何のことだかよく分からないままに、応接セットのソファに身を沈めた。妙な連中だが、危険ではなさそうだ。空手、柔道、剣道、合気道……全部合わせて十八段の熊笹である。一撃で気絶してしまうようなやさ男と女相手に、不覚をとるわずはないという自信があった。

「ところで伝地君、この前のエントロピーの話だが、ラーメンはウンコになってしまえば再びラーメンには戻らないが、そのウンコを肥やしにすれば、ラーメンの元になる小麦になるのではないですか？　ということとは、世の中、元に戻らないことばかりではなく、ぐるぐると回っていく仕組みも存在する気がするんだが」熊笹は伝地に訊いた。なぜかずっと気にかかっていたことだった。

伝地はにやりと笑うと、こう答えた。

「そこでんがな、親分さん。ええとこに気づきはった。だからこそ、この地球という星は、今まで数十億年の間、ウンコだらけになることなく生き続けてこられたんです。そやけど、エント

ロピーは増える一方で、減ることはないちゅうのは間違いないことなんやね。減ることはなくても、捨てることはできる。地球は、増えたエントロピーを宇宙に捨て続けておるんよ。ほなら、その話をしまひよかいな……」

伝地はそう言うと、テーブルを挟んで熊笹の向かい側に座った。熊笹は目の前にあったカップ酒の空き瓶を一つ取って、伝地の前に置き、一升瓶からなみなみと日本酒をついだ。

そこにマリアが戻ってきた。

「親分さんのお好みに合わせて和服を……と思ったんだけど、ごめんね、こんなのしかないの」

見ると、マリアは浴衣を着ていた。裾のあたりに「山田屋旅館」という文字が入っている。

驚いて見つめている熊笹の隣に、マリアは寄り添うように座った。熊笹の肩に、マリアの柔らかな二の腕が触れる。浴衣の合わせ目からは、白い胸が覗いている。どうやら下には何も着ていないようだった。

「寒くないのかね？」

熊笹は動揺を隠すようにそう言ってみた。

「少し。でも大丈夫よ」

「ほなら、後はマリアに任せるけん。マリア、親分さんにエントロピーの話をしてあげなはれ」

伝地が言った。

「エントロピー？ あ、ウンチの神様のお話ね。いいわよ。」

昔々、山奥にクマさんとウンチの神様が棲んでいました……」

マリアは突然、シュールなお伽噺のようなものを語り始めた。

「クマさんはとても大食いで、森の木の実をいっぱい食べて、大きなウンチをするのです。それで森がウンチだらけになってしまったので、それを見ていたウンチの神様が……」

熊笹は黙ってマリアの話に耳を傾けた。

マリアの言葉は、まるで子守歌のように、心地よく熊笹の神経をときほぐしてくれたが、決して眠くなるということではなく、話の内容は鮮明に脳裏に残っていった。

伝地はいつしか応接セットを離れ、コンピュータの置いてある部屋の一角に行つて、何やら作業を始めてしまった。おかげで熊笹は伝地の視線を気にせず、マリアの温もりを身体に感じながら、この心地よいお伽噺を心ゆくまで堪能することができた。

それからしばらくの間、熊笹は毎晩のように事務所に通い、伝地とマリアの話聞いた。

家に帰ると、二人から聞いた話を復習するように、耕作に手紙を書いた。毛筆で書かれた堅い調子の文章のあちこちに、「エントロピー」という文字が一種異質な表情で散らばっていた。物心ついて以来、熊笹が手紙の中で横文字を使ったのは、多分これが初めてだった。

一方、伝地がまとめたデータ解析は見事なものだった。

熊笹が残した資料をさらに整理分析し、一部の企業が今後日本中の農地に対して抱いている野望について、大局的戦略から詳細な計画に至るまで、一目で見渡せるようにまとめられていた。

また、熊笹が生前、財界、政界とのどんなパイプを築いていたのかを知ることができる交友録のようなものも出てきた。

熊笹はなかなかのコンピュータ使いだったとみえ、自分の日記をパソコンの中に書き残していたのだ。

事務所に侵入して都合の悪い資料を奪おうとした連中も、まさか熊笹が大事なものを磁気ディスクに入れていたとは気がつかなかったようだ。

老齡、右翼、身長百八十を越す大男……というイメージから来

る固定観念に縛られていたためだろう。

熊笹は、熊弥の顧問弁護士を訪ね、遺産相続にまつわる手続きを進め始めた。

熊弥の遺産の大半は不動産で、総額は大変なものだった。税金分を差し引いても、予想をはるかに超えた額が残るようだった。

熊笹は、貸しビルや貸家など、定常収入を得られるものはそのまま残し、土地の多くは処分することにした。

麻布の事務所も処分することにした。街宣車二台は、クラウンを改造した自動車修理工場に頼み、濃い青緑色に塗り替えてもらった。そのうちの一台を、伝地とマリアに「授業料」代わりにプレゼントした。二人はその車に乗ってまた旅に出ていった。

【森才】

ロビーにカランコロンと下駄の音が響き渡るのを聞いて、初老の守衛が飛んできた。

「お客様、失礼ですが、当ビルは下駄履きはご遠慮願っております……」

「それは失敬」

熊笹はそう言うのと下駄を脱ぎ、裸足になると、構わず受付のほうに歩き出した。二人の受付嬢は、すでに緊張で顔が青ざめている。守衛がすぐに熊笹の後を追いつ、前に立ちふさがった。

「失礼ですが、お約束でしょうか？」

「ええ、秘書室の榊田さんから連絡をいただきました。二時に第二会議室というところへ来るようにと」

「第二会議室ですか……六階ですが……。佐藤さん、スリッパかサンダルを……」

守衛は受付の女性の一人にそう言ったが、熊笹はにこやかに笑うと、裸足のまま階段のほうに歩き始めた。

「あ、お客様、お待ちください。エレベーターはこちらで……いえ、私がお案内いたしますので……」

守衛が再び熊笹の前に立ちふさがり、押し戻すようにして、とりあえず守衛室に通した。

結局、会議室にたどり着くまでには十五分もかかった。受付の女が柘田と連絡を取り、熊笹の身元を確認するまで三分。もう一人の女がどこからかゴムのサンダルを捜してくるのに八分、守衛が人目をはばかるようにしながら通用口横のエレベーターを使つて熊笹を会議室に案内するのにさらに四分……。

会議室では、柘田だけではなく、愛美須開発会長えびすの堀根本人と平成農村開発塾の理事・岳見が待っていた。それを見て、守衛は改めて熊笹に九十度の最敬礼をし、非礼を詫びた。

「どうでしたか、久々の里帰りは？」

岳見が笑顔で熊笹を出迎えた。

「いろいろと勉強させられる旅になりました」

熊笹は答えた。

「そうですか」

岳見は熊笹をクロワツサン型の洒落たテーブルの席に案内しながら、すでに席についている堀根に向かって紹介した。

「会長。噂の大西熊笹さんです。大西熊弥さんのご子息ですよ」

「堀根です」

堀根は椅子にかけたままそう言った。

熊笹は軽く会釈して、同じように名前だけ名乗った。

秘書の柘田も名刺を差し出し、簡単に挨拶した。

熊笹がテーブルに着くなり、岳見は早口で話し始めた。

「今日はちよつとしたレクチャーをしたいと思ひましてね、こう

してわざわざお呼び立てしたわけです。私ども、平成農村開発塾とっておりますが、この財団法人の使命について、よくご理解いただいた上で、先日ご相談した件に、なにとぞご協力賜りたいと思ひまして……」

岳見がそう話すそばから、梶田が、アート紙にカラー印刷された上等なパンフレットを熊笹の前に差し出した。

「都市と農村の連係プレー・日本の未来を分かち合う喜び」

表紙に印刷された若草色の大きな文字が、まず目に飛び込んできた。その下には、巨大なパラボラアンテナが立つ草原に、朝日を浴びて銀色に輝く温室が並んでいる写真が使われている。国籍不明の風景だ。もしかしたら合成写真かもしれない。

「私たちは単なる金儲けのゲームには飽きてしまった人間です。残りの人生は、この国の発展と平和のために尽くしたい。私利私欲を捨てて、私たちが持っている資本力や技術力を、国民のために投入したい。そのため受け皿がこの平成農村開発塾なんです」

岳見が言った。

「参加企業は今のところ五十五。他に五つの公共体が加わっています。企業の内訳は、銀行、証券、保険、建設、電機、機械メーカーなどが中心ですね。財界のトップが協力し合って、過疎に悩む農村地帯の発展に尽力しようというわけです。『塾』というネーミングには、経済活動を超えた、日本人としての愛国への決意と希望を託したつもりです」

脇のテーブルに据え付けられているコンピュータを操作していた梶田が、岳見に目で合図した。

「準備ができたようなので、さっそく大西さんの故郷、明西町のケースを私どもが作成したアセスメント・ビデオを見ながら説明しましょう」

岳見の言葉が終わるか終わらないうちに、どこからともなく明

るい調子のシンセサイザー音楽が流れてきた。

同時に、壁にはめ込まれた大型スクリーンに、緑色の映像が映し出される。幾何学模様のように見えたその映像は、やがてズームアウトしていくにつれ、一枚の葉の葉脈を拡大接写していたものだと分かった。

「緑とともに、地球とともに……私たちは地球環境との共存を守りながら、日本の豊かな未来を切り開きます」

歯切れのいい男性のナレーションとともに、画面は一転して緑に被われた山里の空撮に切り変わる。

熊笹は黙ってその「ショー」を見守っていた。

どこか懐かしさを覚える風景……空から見た明西町の姿だ。

やがてタイトルがスクロールして現れる。

Eー 『農』への発想の転換——THE CASE IN MEIS

「明西町は東北の一山村です。町の面積の七割は山林が占めており、稲作に適した平地はほとんどないため、昔から、林業や、段々畑を利用した野菜栽培、果樹栽培などが産業の中心でした。また、小規模な水田はあるものの、反収がそれほど上がらないために、米余りの現代においては、まっ先に減反政策の対象になり……」

ビデオはまず、明西町がいかに現代社会から取り残されつつあるかというデータを並べたてた。

そうした導入部が五分ほど続くと、今度はいよいよ開発計画の概要が、美しいコンピュータ・グラフィックスを使って説明され始めた。

「町の最南部に計画されている「グリーンパーク・ガーデンハウ

スビレッジ」は、今は休耕田と果樹園があるだけの寂しい地区です。ここに五十区画の別荘地を造成することによって、土地の活性化を図ります。もちろん、ここでも「自然とともに」という私たちのポリシーは貫徹されます。各別荘には平均三百坪の畑と五百坪の果樹園がついています。

これらの農地を保守・管理するのは地元の方々です。収穫された作物は、宅配便で順次別荘オーナーの元に届けられます。もちろん、別荘のオーナー一家が地元の方々と一緒に農作業をすることもでき、都市生活者と農村地域住民との、触れ合いのある、ハートフルな交流が生まれることでしょう。一方、地元農家の方々には、この契約農業により、今後は毎年の収穫高のばらつきによる生活不安が解消されます。その精神的余裕こそ、明るい未来に向けての、新しい地域文化を生むパワーになることでしょう……」

コンピュータは、茶色く塗られた休耕田に、様々な緑を付け加えていく。果樹の木々は緑の葉をつけ、畑には青々とした野菜が育っていく。まるで見えない絵筆が、早回しで絵を描いていくような映像に、機械オンチの熊笹は少なからず驚かされた。

最後に、ビデオは、ハイテク農業や衛星を使ったCATVネットワークの活用をうたった。

「……人間の英知はビニールハウス栽培を発明し、霜や悪天候という敵を乗り越えて、安定した作物栽培の道を開きました。しかし、まだまだ改善の余地は残されています。テレビカメラとコンピュータ網を駆使した完璧な農場管理。衛星から送られる天気予報のデータと連動した、ハウス内の完全温度コントロール。これからは、寒い夜中に起きて、雪をかきわけ、ハウスの様子を見に行くなどという手間もいりません。暖かい家の中で、リモートコントロールカメラの映像を最低限チェックし、コンピュータの端末を操作するだけでいいのです。この技術はすでに、平成農村開

発塾の理事企業でもある××電子産業が開発しており……」

スクリーンでは、イラストで、農家のおかみさんが笑顔でコンピュータの端末を操作しているところが映し出される。それに合わせ、ハウス内の野菜がニコニコ笑いながら成長していく。

……およそ二十分ほどだっただろうか、デモンストレーション・ビデオは終わった。

「これは私たちが目指している夢の、ほんの一部にすぎません」
岳見が言った。

「ほんの一部？ あの小さな町で、これ以上の計画を展開していくということですか？」

熊笹が呆れたように訊いた。

「そうじゃない」

それまで黙っていた堀根が、少し苛立ったような声を上げた。

「明西町は、単なるテストケースにすぎない。あの小さな町だけのために、これだけの企業が集まるわけではない。例えばうち……愛美須開発は、この明西町のプロジェクトには直接参加しない。あの町の開発規模程度では、うちのような大型開発を専門にしている総合企業では合わないからね。」

ただし、私は開発塾の特別顧問という立場上、今後の日本の農村を開発していくトータルなアスペクトでのフォローをしなければならぬ。こうしてあなたと直接会っているのも、ボランティアアミみたいなものさ。目標は、まず東北一帯に、この開発塾の理念を浸透させていくことにある」

「それで、余輩に何を期待していらっしゃるのでしょうか？」

熊笹は低い声で、そう訊いた。

「地域の活性化を促すには、人的ネットワーク作りや情報戦略活動が不可欠なんだ。効率的な人心把握と言い換えてもいい。つまり、ブルドーザーで山は動かせても、人は動かせない。そこに君

の活躍の場がある。これは技術論じゃない。多分に政治的、実戦的な話だ。分かるだろう？」

「よく分かりました」

熊笹は不敵な笑みを浮かべ、そう言った。

「大変よく分かりました。例えば岩手の五十戸町ごじゅうのへの大型畜産農家・加納さんのところは、飼料会社から一億円以上の借金があります。しかし、隣接地に計画されているスキー場建設計画に反対して立ち退きを拒否しています。彼は町の名士でもあるから、彼が動けば他の反対派も総崩れになるでしょう。そこで、その地域の活性化を促すために、余輩が『情報戦略的』に地上げをする……と」

堀根は黙って熊笹を睨み返した。

熊笹はさらに他の実例を挙げた。愛美須開発がいくつかの子会社、幽霊会社を通して、松浜に様々な政治資金を流している事情に通じていることもほのめかした。すべて、伝地から受け取った資料で知ったことだった。

「ほうほうほう……そこまでお勉強されましたか。いや、それは……。となると、話はぐっと簡略化できますな」

熊笹の話を一通り聞き終えたところで、岳見が微笑しながらそう切り出した。

「岳見さん、あとは任せます」

突然、堀根は無表情のまま席を立ち、さっさとドアのほうに歩き始めた。汚れ役には加わらないということだろうか。その背中に、熊笹は語気鋭く、こう言った。

「お待ちください。会長殿に一言だけ申し上げます」

堀根は歩をとめ、身体を半分だけひねって、熊笹を横目で見た。「あなたがたはエントロピーの法則を無視していらっしやる。五十年後、百年後の子孫の分まで土地を収奪する権利は、我々には

ありません」

「ほう、エントロピーときたかね」

堀根は薄笑いを浮かべて低く言った。

「社会のエントロピーを管理しているのは私たちだよ、大西さん。私たちがいなければ、経済も政治も混乱して、社会はエントロピーだらけになる。」

大西さん、趣味の理論づけをしたければ、どうぞおやりなさい。ただし、いつの時代でも、理論よりも、実践手段を持っている者のほうが強いということを忘れないことだね。理論では世界は動かない。まあ、せいぜいもっとお勉強なさることだ」

堀根はそう言うと、さっさと部屋を出ていった。

残された岳見と榎田が、きまり悪そうな顔で熊笹を見つめていた。

【森木】

ガチャン、ガチャン……。

プレハブ事務所の土間に、無気質な音が連続して響く。

「おはようございます」

「今朝はしばれるねえ」

「土が凍りつく前に、U字溝は全部掘らねえとつれえなあ」

「なあに、バックホウさ使うんだべ？ 関係ねえよ」

機械音に混じって、いつも通り、どこことなく控え目な朝の挨拶が交わされる。

そんな静かな空気をを、所長の苛立った声が乱した。

「どうしたの、室さん。ぼーっとして。まだ目が覚めてないの？」

事務所に集まっていた十人ほどの農民が、一斉に声のほうに向いた。

タイムカード管理機械の前で、室竹子がカードを持ったまま立ち尽くしていた。

「そのスリット……細長い穴にカードを上から入れて、強く押し
て」

手ぬぐいで姉さん彼りをし、モンペ姿の竹子は、それでも石のように動かなかつた。目には涙がうつすら浮かんでいる。

「どうしたの？ もうすぐ八時半だよ。一分でもオーバーすると時給が切り捨てられるよ」

紺色の事務服を着た所長が言った。

「……もう……嫌だ……」

深い皺が刻まれた顔を、キツと所長のほうに向けると、竹子は震える声でそう言った。

「何が？」

「あしらは百姓だ」

「いや、違うぞ室さん。今は企業人だ。会社から賃金貰って働く企業人だ。企業人としての自覚を持たなければ駄目だ」

「あしらの土地で働くのに、なんで他人から金貰うんだ？」

「もうあんたがたの土地ではないでしょう。会社があんたがたの負債を肩代わりしたからこそ、みなさんは家屋敷までは取られずに済んだんでしよう。いつまでも甘えた気持ちではいかん
あ」

所長は不機嫌そうに言った。

事務所の中の空気がたちまち張りつめた。

作業着姿が集まっている人々は、みんな五十歳以上だ。男は土地の整備に、女は別荘用の畑仕事などのために、日当四千六百元で雇われている。この前まで自分たちのものだった土地で、今は賃金労働者として働いているのだ。

竹子はタイムカードを握り締めたまま、事務所から外へ、ふら

ふらと出ていった。その後をみんながためらいがちに追った。

「室さん！ 今日には休むのかね」

所長の声が、室夫人の背中に容赦なく浴びせられた。

「昔は室山田の大地主だったか何か知らんが、いつまでもわがまは許されないよ、室さん。補助金貰うだけ貰って、あとは知らんじゃ済まないんだから、世の中は」

竹子は振り向くと、絞り出すような声で言った。

「百姓は、百の作物を作るから百姓つうんだ。米も野菜も牛も二ワトリも、一家で何でもやってきたんだ。大昔から、百姓は百姓だ。百姓があんたら町の人間のために、食い物を作ってやる恩はない」

「その通り！」

突然、大声が冷たい空気を震わした。

一同は驚いてその声のほうを振り向いた。事務所の壁を背に、羽織袴姿の小男が立っていた。

「農家の皆さんのおかげで、日本の国土はまだ壊れないで踏ん張っているんです。農家の皆さんが頑張ってきたおかげで、まだ辛うじて山が残り、水が透き通っているのです。農家の皆さんがこの国を愛したからこそ、この土と水を大切にしてきたからこそ、まだ日本はこの程度で踏ん張っているのです」

「あなた、誰だね？」

所長が呆れ顔で言った。

「大日本大熊憂国社会長・大西熊笹。明西町出身の日本人」

「馬鹿か」

「馬鹿はあなたのほうだ。農地の地力を無視し、石油と薬を投入して土地を疲弊させ、拳句の果てには、地面に勝手に値段をつけて売り飛ばそうとする。あなたがたは売国奴だ」

「何を時代錯誤なことを……。農業ってのは、そんな甘いもんじ

やない。世界経済の勉強をし直したほうがいいね、あんた。ガツトとかウルグアイ・ラウンドとかも知らんのだろ。

さてと、馬鹿にこれ以上つき合ってはいられない。仕事仕事……」

所長はそう言うと、残った作業員たちを連れて事務所に入ってしまった。みんな、熊笹と目を合わせないようにして、所長の後に続いた。

熊笹は室夫人のもとに歩み寄り、恥ずかしそうに微笑んだ。

「余輩もようやく目が覚めました。家まで送らせていただけませんか」

そう言いながら、熊笹は畦道あぜに停めてあるクラウンのほうを見た。

うっすらと霞かすみがかかっている、車体がグレーに見える。

その霞のかかった畦道を、見覚えのあるワンボックスカーが走ってくるのが見えた。

車は熊笹のクラウンの後ろでとまった。

「会長ー！」

車からは、迷彩服を着た青年たちが次々に降りてきた。

一人、二人……全部で四人いる。四人は熊笹のもとに走ってきた。

「会長！ 昨日、指導部長殿から伺いました。憂国社再結成のご決定、ありがとうございます！ さっそく参上いたしました。木村、桜井、吉岡は仕事が都合つかず、後日改めて参るそうです」
青年の一人が、息を弾ませながらそう言った。

「ありがとう」

熊笹は一人一人の顔をゆっくり見渡しながら、そう答えた。

隣でやりとりを見守っていた室竹子が嬉しそうに言った。

「あんた、りえさんが言っていた偉い親分さんだね。それならま

ず、この情けない土地を、あしが案内するよ」

【森木一】

午後から雪になった。

今年はそれでも暖冬で、初雪が遅れていたのだが、雪が降ればあとは早い。真冬には積雪四メートル近くになる。

除雪車の威力で、今では道路が通行止になることはめつたにないが、以前は、春がくるまでひたすら、村人たちはじつと家の中にこもっていたものだ。

愛情ランドの煙突からは、今日も白い煙がまっ直に立ち上っている。しかし、広間から聞こえてくる歓声が、いつもとはかなり違っていた。

ドンドンという床を叩くような鈍い音。それに混じって、老人たちの穏やかな談笑が聞こえている。

玄関には、半紙に墨で書かれた「藁と親しむ講習会・入場無料・どなたでも歓迎」という張り紙が出ている。

広間は藁でまみれていた。

瑠璃沼厚岸の「藁の肥料効果と保温効果を見直す」という講義が終わり、講習会は第二部の「藁細工自慢実演大会」に移っているとところだった。

老人たちは、広間のあちこちに二、三人単位で車座になり、わらじや藁ぐつを作っている。

瑠璃沼や武士俣りえの姿も見える。隅のほうでは、井上が熱心に猫むぐらの作り方を学んでいた。

「そうじゃねえべ、若いの。そこはもそつと堅くしごかねば。都会もんの柔やわこい手では、藁は結えねえか？」

「はい。すみません。こうでありますか？」

「そうそう……」

そうした和気あいあいの光景とは裏腹に、奥の事務室では助役の栗本とサヨちゃんが口論のまっ最中だった。

「サヨちゃん、勝手なこととしてくれては困るがね。このところ、サヨちゃんがレクリエーション係の担当の日はどうも様子が変だと二郎が言っとったけど、こんなことになってるとはなあ。どういふつもりなの。いくらサヨちゃんでも、これは厳しく追及せねばならんよ」

「みなさんもう、ああいう非生産的なお遊びには飽きてらっしゃるんです。好評ですし、何の問題もないと思いますが」

「瑠璃沼を呼んだりして、問題ないわけがないべが」

「瑠璃沼先生の農業研究の成果に、みなさんも随分関心がおありのようですし……」

「だあからまずいんだって。堀さんなんか、この前役場さ来て、やっぱし畑を売るんでなかったって、俺に泣きついてきたのよ。これじゃあ完全に後戻りだろが。」

とにかく、今すぐ解散。瑠璃沼はここには二度と出入り禁止」

「それは、みなさんが納得なさらないと思います」

「みなさんみなさんてな、十把一絡げに言うもんでねえ。池原のじいさんなんかは怒ってるぞ。あんなアカを愛情ランドさ出入りさせるなんて、どういうこったって。今日だって来てないだろうが。野上さんも長田さんも」

「池原さんにも、長田さんにも、これから時間をかけてゆっくり……」

「サヨちゃん！ 目え覚ませ！ どうかしてるぞ」

吐き捨てるようにそう言うと、栗本は一人で広間のほうに歩いていった。

「今日は解散！ ここまで、ここまで！ あーあ、こんなに藁だ

らけにしちまっつて……」

栗本は入口に立つと、大声でそう言った。

一人の青年が、栗本の前にさっと立ちはだかった。井上だった。「藁くずは後できちんと片付けます。それに三時までは使用許可を取ってあります」

井上はそう言っつて頭を下げた。

「馬鹿こけ！ おまえがなんでここにいるんだ。許可もクソも、サヨちゃんが勝手にハンコさ押したただけだろが。そんなもんは認めん！」

「それは変であります。野中さんは役場の施設使用許可係であります」

井上は直立不動のまま食い下がった。

「そうだそうだ。栗本さん、そらあ通らんべえ。掃除はしつかりしとくから、心配すんな」

老人たちの中からも声が上がった。

栗本はぐつと言葉を香み込むと、憤然と背を向け、事務室に戻つていった。

「サヨちゃん、明日は緊急会議だ。もうこれ以上勝手な真似はさせられんからな！ 俺は役場さ戻る。掃除はしつかりとしておきなさいよ。藁屑一本でも残つてたら……」

サヨちゃんは栗本の話聞いていかなかった。視線が栗本の肩越しに、廊下のほうに向けられている。栗本はその視線を追つて、振り向いた。

「こんにちは。ご無沙汰いたしました」

「大西さん！」

サヨちゃんが嬉しそうな声を上げた。それを聞きつけて、広間から井上も飛び出してきた。

「会長！」

廊下には、羽織袴姿の大西熊笹が笑顔で立っていた。後ろには、迷彩服を来た青年たちが四人ついていた。

「あんだ……」

栗本は何か言いかけたが、後が続かなかった。熊笹は、驚いた顔で突っ立っている栗本に言った。

「栗本さん、またしばらくこの町にお邪魔しますよ」

「あんだ……松浜先生を敵に回してどういう気だね。後悔するよ……」

「余輩は愛国思想を貫いているだけです」
熊笹は静かにそう答えた。

【森木十】

「ああ、私だ。どうなつとるのかね、一体。あの時代錯誤の小男、親父の後を継ぐどころか、かえって面倒を起こしているそうじゃないの」

「そうらしいですね。どうやらとんだ見込み違いのようですよ。岳見さんも慌てていますよ。しかも、鬼熊に依頼するつもりだった例の計画の詳細を知っているらしいんですよ。」

「それどころか、先生が今度の総裁選出馬に向けて打っておいた、^{すずむね}鈴宗商事との裏取引の件まで知っていましたよ」

「それでどうする気だ。しめあげるか、放っておくか？ どうせ大したことはできんだろうがな。マスコミとつながっているフシはないんだろう？ それがいちばんやっつかいだからな」
「大丈夫でしょう。何もできないと思いますよ。あの学者くずれと同じですよ。マイナーな連中は、相手にしないのがいちばんです。地元新聞社は押さえてありますし」

「ああ、それは問題ない。私の地盤だからね。はねつかえりの若

造記者とかは分らんが、上層部はどうにでもなるから」へとにかく、いつまでも明西町の小さなプロジェクトで足踏みしているわけにもいきませんからね。鬼熊は何かと便利でしたが、まあ、代役は他にもいるでしょう。最後は箭内組やないも使えますし」

「使わずに済めばいちばんいいんだがね。暴刀団を使わないリゾート開発というのを一度くらいやってみたいよ。まあ、明西は明西でそれなりに進めるとして、他をどんどんやっていきなさいよ」

「そうですね。よろしくお願いします」

「鬼熊の息子の件は、しばらくは様子見だな。今は下手に動かんほうがいいだろ」

「分かりました」

【森木才】

年も押し迫ったある日、熊笹と耕作と井上はガーデンハウスビレッジのはずれにある、室夫妻のもとを訪れていた。

室夫妻は、かつては室山田地区でも一、二を争う地主だった。しかし、農業改善委員会の勧めでトラクターやコンバインを導入し始めたあたりから借金がかさみ、その後の減反指導のあおりも受けて完全に行き詰まった。

仕方なく、今回、土地の大半を手放した。それでもまだ、水田が一町歩、畑が一町三反歩残っている。しかし、ご主人はリウマチで身体がきかず、子供たちもみな東京へ出てしまったので、田畑は荒れるに任せていた。

「高く売れるときに売って、その金を老後の生活設計に役立てると何度も言われたさ。しかしなあ、目の前で自分の土地が都会のやつらの思うままにされるのを見るのは辛いだよ」

もうすぐ七十に手の届く、室廣國ひろくには言った。

「竹子たちを雇ってせつせとこさえているU字溝だって、末端処理施設がいい加減なまま川に流すんだ。汚水は土で浄化するのが当り前で、土に触らせてもらえねえようなコンクリートの川なんか作ったらいかん。別荘ができたなら、都会もんの糞も、味噌汁の残りも、てんぷらを揚げた後の油も、みんな浄化されずに山田川に流れ込むだろうなあ。そういうのを見てるのは辛いだよ」

「しかし、意地張って残った土地さ売らねえのはいいが、荒れ放題になってる畑や田んぼを見てるのも辛いわなあ。とうちゃん、これはもう、ほんとに渡りに舟つうこってねえかい？」

妻の竹子が言った。

廣國は深く頷いた。

「井上さんとか言ったね。岩野さんの保証付きなら心配いらねえべ。うちの空いてる畑も田んぼも、みんな任せる。何を作ってもいい。ただで貸してやる」

「本当でありますか！」

井上が歓喜のあまり声を上ずらせた。

「ああ、自由にやってくれ。向こうの離れと納屋も勝手に使ってもいい。ポロだが、手を入れりゃ、何かの役には立つべ。ただ、化学肥料や農薬に頼りっきりのやり方はやめてくれ。分からんことがあったら、瑠璃沼先生や、先生のお弟子さんたちに訊きな。どうせ冬の間はなんもでけんだろ。のんびりやりな」

「ありがとうございます！」

井上は畳の上に額をすりつけんばかりにして礼を言った。

「ありがとうなあ、室さん。何十年も村さ空けておいて、今さら知り合い面して、こんな虫のいい頼みをして悪いんだが、感謝するで」

「感謝いたします」

耕作と熊笹も、一緒に頭を下げた。

「本当のこと言うとなあ、岩野さんも、クマ村長と東京さ行ってからはあんま素晴らしい評判聞かんかったから、心配しとったで。しかし、りえちゃんから話さ聞いて安心した。親分さんも立派な息子さんに代わって、岩野さんも、これからが本当の人生だなあ」
竹子が二人に沢庵を勧めながら言った。

「ほんとだ。こんな若い男も連れてきてくれたしな。なかなか性根も座^{うね}っていいそうだし、楽しみだな」

「井上はもともと農家の三男坊でしてな。中学生になるまでは畑仕事も手伝っていたという話で……そうだろ、井上」

耕作が井上に質した。

「はい。しかし、その後、住宅開発で農地法の規制が外れたとかで、屋敷の周りだけ残して田畑は全部売り飛ばしました。金が入って、兄貴は改造したソアラ乗り回すし、親父はキャバレー通いの毎日でした。お袋はミンクのコート着て寄り合いに出て顰蹙買^{ソク}うし、自分も一時は族をやったりして、一家総不良化でありました」

「ゾクって何じゃね」

廣國が訊いた。

「暴走族のことです」

「暴走族上がりの右翼というのは、結構多いんだよ」

耕作がそう付け加えた。井上は照れ笑いしながら、軽く頭を下げた。

「まあしかし、土をいじってれば根性はまっ直になるさ。あとは嫁さんでも見つければなあ」

廣國のその言葉に、耕作はにやにやしなからこう答えた。

「実はお目当てがいるんだよ、この野郎には。百姓さやりてえなんて言い出したのも、この土地に住み着きたいための方便なんじやねえかと俺は疑ってたんだ」

「指導部長殿！」

井上が大声を出して、耕作を制した。その勢いで、口に入れたばかりの沢庵のかけらが一メートルも飛んだ。

「自分はそんなヨコシマな気構えではありません！」

「分かったよ。そうムキになるな。室さんだつてのんびりやれと言ってくれてるだろうが」

「はい。のんびりやらせていただきます。しかし、取り急ぎ挨拶だけしてまいります」

井上はそう答えると、冷めかけた焙じ茶ほうじを口に含み、沢庵の残りを一気に呑み込んで立ち上がった。

「挨拶って、誰に？」

竹子が驚いて訊いた。

「任せていただいた畑と田んぼにであります」

そう言うと、井上は雪のちらつく外に飛び出していった。

畑も田んぼも、雪に被われていた。井上は迷彩服の膝まで雪に埋もれながら、目の前の雪を素手で掘り始めた。手が真っ赤になって痺れ始めた頃、ようやく土が見えた。

井上はその土をさらに掘ってみた。表面は凍りついていたが、その下の土は柔らかかった。土を握ると、ほんのり温かかった。

後をついてきた熊笹が声をかけた。

「どうですか？」

「温かいですね」

井上はそう答えると、泥だらけの右手を熊笹の前に突き出した。熊笹は井上の手に握られた土を受け取った。ほんのり温かいような気もしたが、それが土の温もりなのか、井上のでのひらから土に移った微熱なのかは分からなかった。

「これが『日本』ですね」

熊笹が言った。

「日本を愛するということは、この土を愛するということです。日本を守るということは、この土を守るということです」

「はい、会長」

「きつと手強いですよ、日本の土は。さんざん我々に痛めつけられていますからね。でも、我々を守ってくれているのも、この土なのです」

「はい」

熊笹は、井上が掘った穴に自らも両手を突っ込んで、さらに多くの土を掘り取った。土は本当に温かかった。

熊笹は、東京の巨大なビルの中で、この国を自分が動かしていると思いついでいる堀根のことを思った。ビデオテープをセットして、今日も誰かに得意げに解説している岳見のことを思った。そして彼らの下で、命のない言葉を駆使することで生活の糧を得ている多くの者たちのことを思った。

この土は、文句も言わず、彼ら土の強姦魔たちの命をもまた支えている。屈辱にじっと耐えながら、誰かれの分け隔てなく、自分の上に棲む命を支えている。

そして、それはまた、農民たちの姿でもあった。

熊笹の耳の奥に、「百姓はあんたら町の人間のための食料まで作ってやる恩はない」と言いきった室夫人の言葉が甦った。

もしも土や水が、同じように開き直ってしまったら、人間は誰も生きていけない。そんな簡単なことさえ分からずに、堀根も岳見も、この国を殺そうとしている。この国の「発展」の名の下に……。

国とは何か？

そう、この土だ。

水を浄化し、命を育てるこの土のことだ。

ならば愛国とは、国防とは、この土を愛し、守る意志に他ならない。

熊笹は手の中の土を握り締めた。

「井上。我々は命を賭けてこの国を守るぞ」

「はい！」

二人の日本男児は、両手を泥だらけにしながら、雪の大地に立ち尽くしていた。

【森林】

「……だから、そういう『野菜工場』のような工業生産的農業というのは、エントロピーの法則を無視しているわけですよ」

「ほう、大西さんにエントロピー理論を教えられるとは思っていませんな」

「瑠璃沼先生、エントロピーはなにも先生だけの特許じゃないでしょう？」

「これは一本取られた。ハハハハ」

「それにしても、ぼっちゃまが横文字を使うとは、大変身でございますな」

「いや、余輩も本意ではないのだけれどね。まあ、言い換えれば、ウンチの神様の法則とでも言うか……。しかし、そう言うとかえって分かりにくくなるんで、仕方なく使うことにしたんだ」

「会長、自分もこのところ、瑠璃沼先生から、土と水の科学を学んでおります。来年からはこの瑠璃沼理論を実践に移し……」

「とんでもない。畑のことは、まだまだりえばあさんや室夫妻のほうが先輩である。それより君、サヨちゃんとはどうなってるのかね」

「そ、それは関係ないであります！ 野中さんと自分は……」

隊員たちの連日の大工仕事の成果で、室夫妻の屋敷から少し離れた場所にあるこの朽ちかけた離れ屋も、どうにかこの冬を越せそうな程度には甦っていた。その建物から、一晚中、男たちの歓声が漏れていた。

男たちの酒盛りは、朝まで続いた。

冬の夜明けは遅い。東の空がほんの少し白み始めると、待ちきれぬように迷彩服を来た青年が一人、外に飛び出してきた。

「しょんべんは堆肥のところまでやれよ。多少はリンやチツソが補給されるだろ」

建物の中から瑠璃沼の声が出た。

「分かりました！」

青年は、表面が凍った雪を慎重に踏みしめながら庭の隅まで行くと、積み上げられている腐りかけの落ち葉の山めがけて、勢いよく放尿した。

山の端を紫色に染めながら上りつつある朝日が、青年の背中をうつすらと照らし始めた。

隣には二台の街宣車が停まっている。

一台はガムテープでへさっさと返せ 北方領土」という文字を消してある。テープの縁が剥がれかかっている、下の文字が一部見えている。

もう一台は濃い青緑色に塗り替えられ、日の丸とクマのイラストが描かれている。クマは黒一色で描かれているが、どうも顔はパンダに似ている。

放尿し終わった青年は、無言のまま、刻々と色を変えていく東の山を見つめていた。

やがて次々に男たちが出てきて、堆肥の山めがけて放尿した。

圧倒的な光を一筋放ちながら、新しい年最初の朝日の上端が山の向こうからのぞいた。

隊列を作ること慣れてる青年たちは、自然に一列横隊に並び、無言で初日の出を拝んだ。

瑠璃沼と耕作も、その青年たちの列の後ろから日の出を見ていた。

山の稜線の濃い紫色は、たちまち明るいオレンジ色に変わり、直視できない太陽光に吞まれていった。

熊笹は列の前に進み出ると、青年たちのほうを向き直った。

男たちの背後には、暖かそうな湯気を立てている堆肥の山がある。湯気が朝日に照らされ、金色に輝いていた。

その湯気から男たちのほうに視線を戻すと、熊笹はゆっくりとこう言った。

「約束の新結社の結成を、ここに宣言します」

「おう！」

男たちが声を揃えて返事した。

白い息がいくつかの塊になって、朝の寒気の中に溶けていった。

「我々は、土を愛し、水を愛す、真の愛国主義を目指す同士として、ここに新結社を結成する」

「おう！」

「この愛する国土を破壊する、あらゆる商業行為に、我々は断固立ち向かう。我々は、現代石油文明を信用しない。ウンチの神様を信ずる。我々の世代が収奪した結果、資源が尽き果てる未来、土から生まれ、土に還るものを大切にす新しい文明の下で生きざるをえない我々の子孫たちのために、この愛する日本を守り抜く」

「おう！」

「我々は、この主旨に賛同する者たちのあらゆる助け合いを目指す。団結はしない。規則で縛ることもない。ただ、この豊かな水と、肥えた土と、深い緑を破壊する行為に、断固反対する」

「おう！」

熊笹はそこで一息入れ、青年たち一人一人を見渡しながら、また元の穏やかな口調に戻ってこう言った。

「この、主旨に賛同してくれませんか？」

「おう！」

青年たちはますます大きな声で叫んだ。中には、目に涙を浮かべている者もいた。

熊笹は懐から何やら取り出すと、こう言った。

「では、わが結社の新しい紋章を支給します。黒熊の紋草と呼んでください」

熊笹は青年たち一人一人のてのひらに、小さなバッジをのせて回った。

「熊の紋章ですね。カッコいいであります。会長、ありがとうございます
ございます」

青年の一人が言った。

「会長のは金バソジですね」

井上が熊笹の羽織に光っている、金色のパンダバッジを見て言った。

「そうです。これが欲しい人は、後で入手方法を教えます」

「とんでもない。恐れ多いであります」

井上が言った。

彼は、今自分のてのひらに乗っている小さな金属片が、WWFのパンダバッジの白い部分をマジックインキで黒く塗った代物だということなど、知る由もなかった。

「会長、制服はこのままでよいのでしょうか？」

隊員の一人が言った。

「いいでしょう、別に」

熊笹が答えた。

「上出来である。これなら緑と土の中に溶け込み、野鳥も驚かないだろうしな。アーミールックというのは、見方を変えれば立派なエコロジーファッションだな。野鳥の会もご推薦をやつた」

瑠璃沼が横から茶化してそう言った。

熊笹は思わず苦笑したが、それに対しては何も言わなかった。そして表情を再び引き締めると、井上に向かってこう言った。

「井上君。君をこの新結社の東北支部長に任命します。じいや瑠璃沼先生と一緒に、明西で頑張ってください」

「はい。ありがとうございます！」

井上は貫ったばかりの「黒熊バッジ」を握りしめ、力強く答えた。

「ところで、この新結社の名称は何でございますか？」

耕作が熊笹に訊いた。

熊笹は返答に窮した。実はまだ決めていなかったのだ。

「これから考えるよ、じい」

「大日本エコロジスト翼賛会なんてのはどうだ？」

瑠璃沼がにやにやしなから提案した。

「余輩は横文字は……」

「しかし、エントロピーだって受け入れたではないか。これからの愛国思想は閉鎖系ではいかん。開放系でなければ。それとも、大日本ウンチの神様社とでもするか？」

「それはちよつと……」

熊笹が口ごもった。それを見て、瑠璃沼が大声で笑った。つられて熊笹も笑った。

熊笹は、停めてある街宣車にふと目をやった。この車体にはどんな文字を入れれば似合うだろう。

へさつさと帰せ 北方領土」という文字を消した二本のガムテープの、それぞれ右端が剥がれている。

剥がれた下からは、こんな文字が、朝日を受けて光っていた。

〈帰せ 土〉

(了)

■あとがき その一

この作品は、私が「小説すばる新人賞」を受賞した直後に書いたものです。ですから……一九九一年かな。もう、十年以上も前の作品になりますね。

当時、受賞作『マリアの父親』の作風を受け継いだ受賞第一作を書くか、それともまったく違う路線にするか、悩んでいました。この作品は、『マリア……』の路線をほぼ忠実に踏襲したものであるでしょう。

未発表になったまま忘れていましたが、今回、文藝ネットを通じて発表することを思い立ちました。

元ファイルはワープロ専用機で書かれていて、そのワープロが壊れてしまったために、ほとんど打ち直しという羽目になりました。やはりワープロは駄目ですね。しかし、あの頃はまだパソコンも持っていないなかったんだなあ……と、遠い日。

今読み返すと、稚拙な部分がたくさんありますが、あまり直しませんでした。テーマも、今となってはちよつと古いかなという気もします。

再入力しているので、まだ後半部分はファイルが出来上がっていません。でも、続きは必ずアップしますので、最後までおつきあい願えれば幸いです。

二〇〇〇年九月七日 鐸木能光

■あとがき その二

続きは必ずアップしますと書きながら、すっかり時間が経ってしまいました。新作を出版するために奔走していたり、「経済活動」に身をやつしていたりで、なかなか作業ができなかったんですね。言い訳ですが。

今回、ふと思いついて新しいOCRソフト（お試し版）をダウンロードしたことで、一気に残りの作業をすることができました。手元に残っているのは、小さな文字で縮小コピーしたワープロ印刷原稿のみなので、OCRでも結構読み間違いが出ました。ざつと校正はしたんですが、多分まだ直りきっていないところがいっぱいあることでしょう。ご容赦を。

この小説、書いたときは少しこっぴどくしかかったんですが、自分の心がこの十年ですっかり汚れていってしまったせいか、今読み返すと、なんだか妙に清々しい気持ちになりました。

十年経って、日本という国はすっかり元気を失いました。ああ、こんな時代もあったなあという感じですね。

十年以上発表の機会を与えられないままだったこの作品を、細々とでも一般公開できたことで、作家の初志を貫徹できなかった自分に、少しだけ免罪符を与えられたような気分でもあります。免罪されたかどうかは分かりませんが、今は今の戦いが待っています。新作執筆に戻ることにしましょう。

二〇〇二年二月二八日 鐸木能光